

特116

710



始



特116

710

吉野天人

大佛供養

忠信

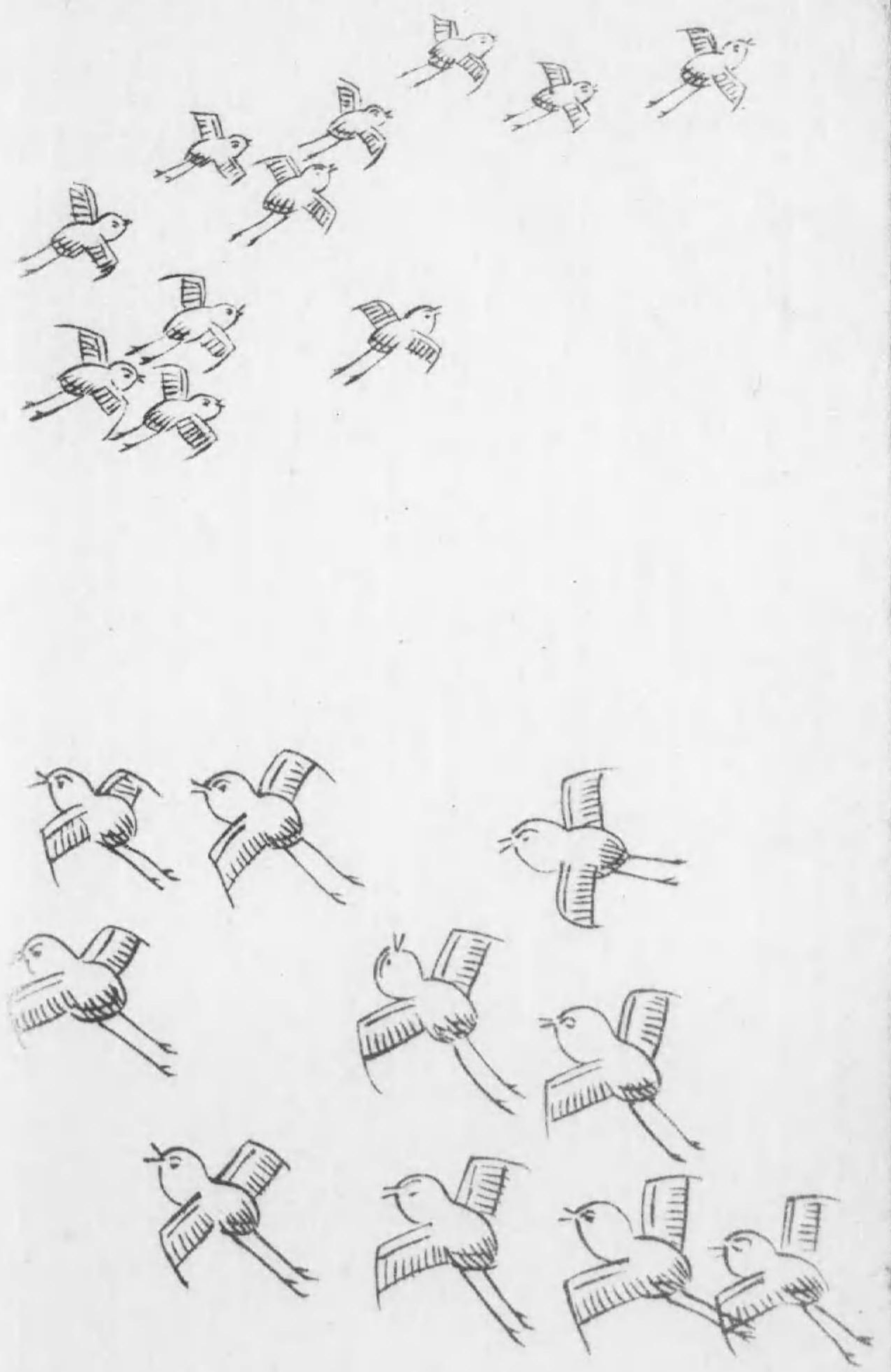
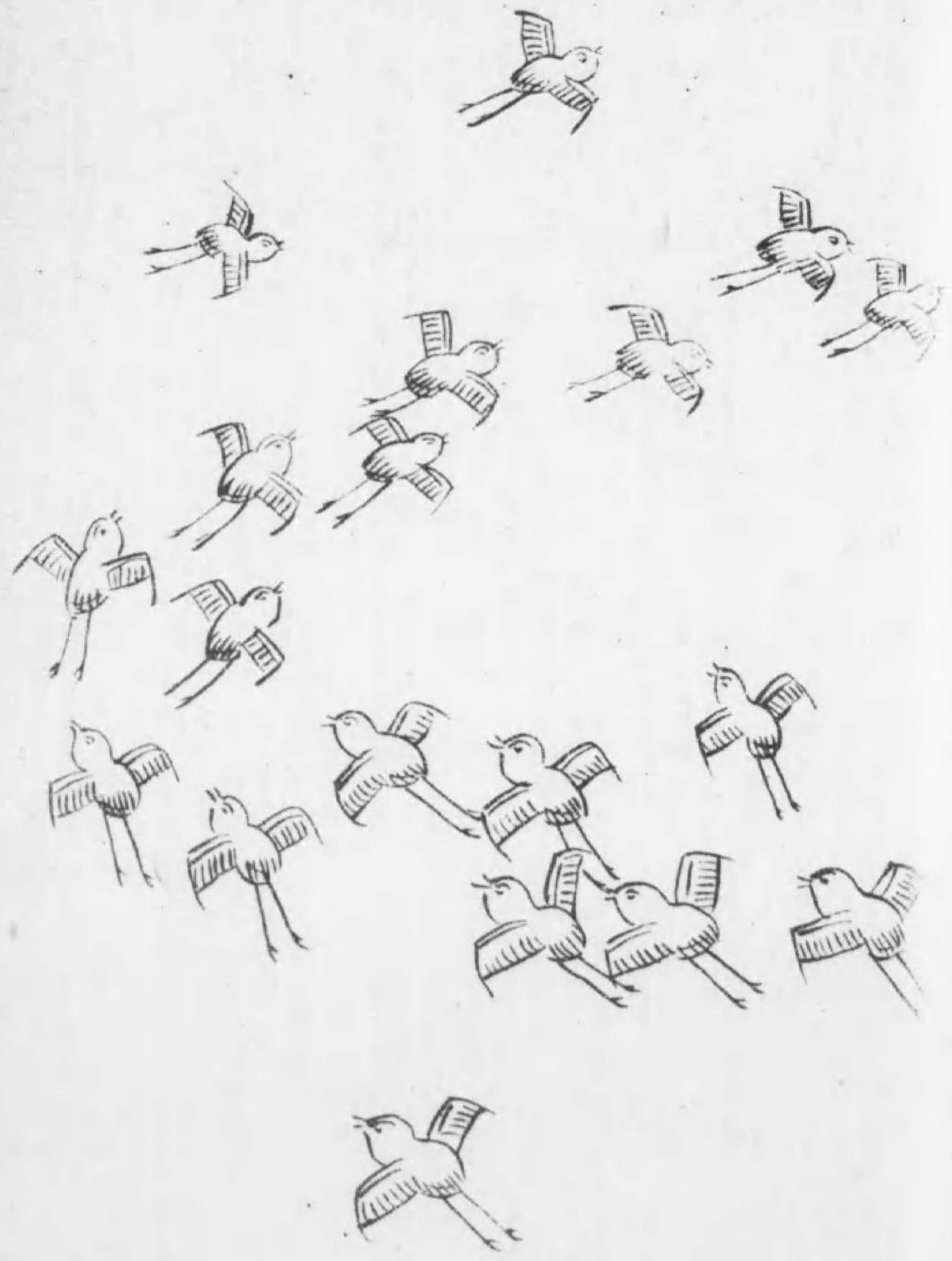
烏帽子折

大瓶狸々

觀世流改訂謄本

外七

~~710~~
~~601~~



字 116
710



觀之
清之
長之
世



風は古今集に出でたる、陽正通照の五節の舞姫を見てよめる歌に「天の風宮の通照ふきとちよ少女の姿しはしとくわむとあを引く。原歌の意は、天の風宮の通照を差きて天女の姿の姿を不替りに留る。霞も靡くは古今集の歌「春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かほりゆくとを轉用す。うつろふとは色の褪せゆくこと。」

吉野山人

三番目
畧脇能

吉野山人

三月

ワシテ天女(前「里女」)

早次弟上
ツヨク
花の雲路を
走るべし。花の雲路を
走るべし。吉野の奥を尋ねん

早伯
これハ都方よほまびきる者よきてい。情
もわれ春よあつらふといか。この花
を。見はる。中よも千本の櫻を年
よ眺めぬ。此千本の櫻ハ。三吉野の

吉野山人

種取り一花と承り及び日向若き

人ごとも伴ひ此度入和州下向仕

此春ハ珠ノ櫻の花心道行上 (三人) 打切ヤ珠ノ櫻の花心

色香よ深むや深緑系捨りかけて

青柳の露も乱る春雨の夜あり

けるが花色の朝志ありして打切氣色

まづ吉野の土は著かむらつ吉野の

七トビかむらつロヤ切花かむらつトビに

はや吉野の土も著かむらつトビに

顔も尾も花もけし猶も鼻深へか

けりトビかむらつトビの呼掛心あり

あつていこくかむらつトビかむらつ

とらん都の者まといふは此ま吉野の

花を承り及びトビかむらつトビの

花を承り及びトビかむらつトビの

いぢあらんと
 此山中へ行くを給ふに
 あたりに
 者あるら。春は
 花を友として
 あり
 縁と
 心

●小話

庭も山路の
 世ぬ人や花の友
 知るも知らぬも
 して諸人の
 袖あけて木の下
 め
 花を
 馬

吉野山人

地土歌

初めて眺めどくなく一馴れて眺めん

早付
しんちゆおどかす事のこと。あやうよ家路

を眺む花を眺め給ひ事。よく不

審よひさく ^{シテ} げよ遠不審ハ序理。

今と何ぞおなじく ^ト 尊いあはれん人

あるが。花よ ^ト せめて来たなり。今宵ハ

さよ旅店 ^ト して。信心を致し給ひあ

吉野夫人

らぞ。其まへの五節の舞。小忌の衣

の羽袖を返し。目の夜遊を見せ申

さん。暫らく ^{カレ上} ことよ待ち給へと ^{地上} 映

白ふ花の蔭。夕映白ふ花の蔭。目の

夜遊を待ち給へ少女の姿現して。

あま ^{カレ上} いらよ来らんと ^上 加陵頻伽の聲

ぞあらし ^{カレ上} 雨よ獲りて ^{カレ上} 是せよけり ^{カレ上} 雲よ

残りて失せなむらり

来序中入

ワキカニ上

ツヨク

不思議や虚空よ音楽聞え異香薫

して花降り

これ活まらむ

地

△脇能ノトキ下リ端
△ソノ他ノトキ出端

代とあや △下リ端 上歌 ともあへねど雲の上 △出端モヨク 雲の上 △上打返

ともあへねど雲の上 琴の音 △上打返

管箏笙 鉦鼓羯鼓や糸竹の聲 澄み

渡る春風の天つ少女の羽袖を返す

●獨吟仕舞

花は戯れ舞ふとあや 中ノ舞 少女ハ

幾度君が代を 打込打返 少女ハ幾度君が代を

撫で一巖もつまぬや 打込打返 春の花の

梢よ舞ひ遊び飛びあがり飛び下る

げよもよあまの君の恵はまる國の天

つ風雲の通路吹き困つるや 打込打返 少女の姿

留まる春の霞も靡く三吉野の 打込打返

吉野の山櫻うらうらよと見えり。又
 笑く花の雲よのり。又笑く花の雲よ
 のりて行くも知らざり。あつよける。

大佛供養

解題

平家とびて後、其遺臣忠七兵衛景清常に頼朝を撃たんと謀り、南都大佛供養の日、社人に扮して頼朝に近かんとしてたらし見頭されて待た果さざりしことを作たり。此事蹟は同じく平家の遺臣中務宗資に託きての事かあらう。落曲作者景清の名ためて、これに接びつけたりと見ゆ。能本作者は文に作者不明。別名を宗資ともしふ。景清の事を作れる曲別に景清あり。

詠の方梗概

全巻のさうりとしてたら曲柄をたどる。変化に富み、然も通じてさうりたる位を取らず。先づ次第は落着きありて確りと謡ひ、名吉以下詞は花をさうりたる。さうりたる位を取らず。先づ次第は落着きありて確りと謡ひ、名吉以下詞は花をさうりたる。さうりたる位を取らず。先づ次第は落着きありて確りと謡ひ、名吉以下詞は花をさうりたる。

立衆

出の二聲は使かたすうりて扱ひ、さうりたる位を取らず。先づ次第は落着きありて確りと謡ひ、名吉以下詞は花をさうりたる。

十分に折み調の「は何者かれば」... 言は氣を付けて凍々しくまの杖ら以下問答... 平家物語の「平家物語」...

辭解

あすれば草の... 草の名の志草... 大佛... 若草邊... 向顔... 花... 平家物語の「平家物語」...

紅葉

平家の紅葉... 壽永の秋の... 紅葉... 壽永の秋の紅葉... 平家の紅葉...

三笠の森

三笠の森の陰類... 三笠の森... 三笠の森の陰類... 平家の紅葉...

春日の里

春日の里... 春日の里... 春日の里... 平家の紅葉...

果

果... 果... 果... 平家の紅葉...

舟

舟... 舟... 舟... 平家の紅葉...

将頼朝

将頼朝... 将頼朝... 将頼朝... 平家の紅葉...

詰する様 思ふ心 元禄本以前には 己が名の云 思ふ心は自然自分の名の頭字の如く思心
を述ぶ。 白張淨衣 知らんといふを白張にかく。白張は社人、仕下等の 立烏帽子 身が軽き仕
る鹿造の烏帽子。公卿などの 插の落葉の云 姿にたると云ふ意に云ひかく。古今集に奈良
ふ宮の古 天が下 雨にかけ 姿を替へ狩衣 集たもに云ひかく。伴野物語(後撰
けふばかりこそたづも鳴くならぬ。塵に交る云 塵に交るとは和光同塵の意にて神さへ
翁さかとはたきならしくならぬ。塵に交る云 塵に交るとは和光同塵の意にて神さへ
生に法縁し給ふればまゝして景清の社人の姿にて供養の場所に至ち交らる世俗の塵に同じ衆
なり。実寺は神佛混濁の社又は寺を云ひたる詞。春日大明神の社地をも寺なればかく作れ
り。春日 春日神社 御奴 神に仕ふ。水波の隔 水は波の異性成は水の波動にて此二月二に
ふ。佛も神も同一體 神佛も歸する所同一體に外ならずとす。貴賤の事云 貴賤を
はぬ法會な 具足 鐘以下具足の金物の光を被つて轉じて打物の事に云ひ及び。詞の語りた
るにの意。 さらぬやらにて 何事もなき 言談道断 言談にて云はん方なき意。遊園の
者 非常を警めて守 志れ者 高聲 高き聲。ゴオシヨオシ 下知 命弓矢
の恥辱 武士の あざ丸 景清の帯びたる大刀に作者の假に命。勝負を見せにけり
景清が若武者を討 霧朽立ちかくすや 景清、虎身の術を行ひ
ち殺したるをいふ。 霧朽立ちかくすや 景清、虎身の術を行ひ

四五番目
畧二一番

大佛供養

九月

ツシテレ 景清母
子方テ 悪七兵衛景清
ワキ 源頼朝
立衆 從者

シテ次第上
ヨウク
あまのれ草のきよきにてあまのれ
草のきよきにてあまのれ草のきよきにてあまのれ
らん 此の平家の侍悪七兵衛景
清よ。われ此向ハ西國の方よ。い
し。宿願の子細あるよ。より。此程まか
り。清きよき。七日系は龍申して。又

大佛供養

承りしは。南都大佛供養の由申は。
 其も若草一邊は母を一人持ちては
 程よ。あやうのちうがー貴賤は紛れ。
 向顔のため唯今南都入と急ぎ。
 あさねやびよあしこ。さーも榮えー花
 紅葉の。壽永の秋のいゝあは。思を
 ぬ風よ誘をりて。さーも馬りやー都

下教中
 の空ひつらも入都の憂わはあまび
 繫ね船のせびもなくら矢の家よ
 生れ来て 上乗 三笠の森のせげ頼む。
 三笠の森のせげ頼む。其は 打切 まきのあが
 らへて。未だ此せの序きまひ。神も教の
 牡鹿鳴く。春日の里よ著きよけり。春
 日の里よしあまら。程よ。

南都若草皇太子著あし。此のあたりに

まじりておんを奉ねるやと云ふ

「かゝる我が子の景清は。此程にござり

あはれに。南無也。世の諸佛。我の子

の景清も。いたゞり奉りて賜ひ給へ

らむ。南無也。由ら。我の子の聲と

聞へ。おん。景清も。我の景清も。此のあたりに

景清も。おん。景清も。此のあたりに

まじりておんを奉ねるやと云ふ

「かゝる我が子の景清は。此程にござり

あはれに。南無也。世の諸佛。我の子

の景清も。いたゞり奉りて賜ひ給へ

らむ。南無也。由ら。我の子の聲と

聞へ。おん。景清も。我の景清も。此のあたりに

まじりておんを奉ねるやと云ふ

おもひ思へば 地上 寝も
 せいで夜を眼 ぬこの身を隠も
 ありぬかへ 景清のうちも母も哀と
 思一めせ 上歌 一門の船のうち一門の
 船のうちも肩を比へ膝をくみて 處
 狭くも日月の景清 誰よりも座
 船よあつて 類その以下

武略 ちかへし ちかへし ちかへし ちかへし
 楫の舟に乗せ 徒隔あり 一
 ちかへし ちかへし ちかへし ちかへし
 ぬかへし 馬よあつて 如くあり
 は 夜の明けゆく程 舟 暇ゆ
 ちかへし ちかへし ちかへし ちかへし
 ちかへし ちかへし ちかへし ちかへし
 ちかへし ちかへし ちかへし ちかへし

母の慈悲。今詞の末も頼も

^{地上歌} 柞の森の雨露の。柞の森の雨露の。

梢も濡き我が袖を。志ほりかねたる

涙のあしらが親心かありむ母の門

送り景清もあをを見返りて涙と

共よ別れけり涙と共よ別れけり

^{立衆一せい上} ^{ツヨク} せよ隠れあもたぬ他藍佛の供養。急

ぐあり ^{子方サシ上} 打つれり源家の官軍。右

大將頼朝と我が事あり ^{立衆} 参く

も此身あり。身も我の心は健立大

佛殿とあもたぬ ^{ワキ} 又この君の

身威光。今このは昔もあひよ

大他藍の身供養。大他藍の身供養。

光りあやぐ春の日の影の影

立衆上歌

~~~~~

~~~~~

~~~~~

高き。は。の。は。聲。の。様。ご。よ。供。養。を。な  
ま。ご。あ。つ。が。た。ま。い。供。養。を。な。ま。ご。あ。り  
ま。た。ま。い。面。白。や。奈。良。の。都。の。時。め  
ま。ご。あ。り。節。の。物。言。わ。り。ま。ご。あ。り  
ま。ご。あ。り。と。あ。つ。た。ま。い。謀。を。思。ひ。ま。ご  
ご。ま。ご。あ。り。無。十。兵。衛。景。清。の。ま。ご。あ。り  
ま。ご。あ。り。白。張。守。夜。の。ま。ご。あ。り

冒。ご。あ。り。と。あ。つ。た。ま。い。田。代。の。祭。ご。あ。り  
捕。の。葉。の。時。雨。降。り。お。く。天。下。よ。身  
を。隠。れ。お。く。か。い。敷。を。か。い。敷。か。い。身。の。果。を  
哀。あ。り。上。の。安。を。暫。一。狩。衣  
ま。ご。あ。り。と。あ。つ。た。ま。い。入。る。ま。ご  
め。ご。あ。り。神。だ。よ。も。地。上。の。祭。ご。あ。り  
供。養。の。場。ご。あ。り。と。あ。つ。た。ま。い。ま。ご。あ。り  
ま。ご。あ。り。と。あ。つ。た。ま。い。何。者

大正十一年

〃

ありては前向女へ参りしにすむ所か  
 しくして春日のちぬをいひてぬの  
 佛の所供養場を清めの役入あるを。  
 何よともめ給よらん 口平カノ上 春日祭よ  
 めらぶとてい佛の所供養 ミナ のう  
 水波の隔と向く時ハ佛も神も同  
 一體其上貴賤の事あるも何とて同

み給よんか 口平カノ上 包むとまじと神ハ猶  
 君をさすのち威光 ミナ 顯れけるか白  
 張の 口平カノ上 脇よつ見ゆる具の金の物  
 光を交り 口平カノ上 打物の 地上 鞆つまうたる  
 詞の末者のはるのいと貴めければ顯  
 れたるい思ひらしてからぬとてい  
 帰つて入るべきに 口平カノ上 言 口平カノ上 道



平家の侍悪七兵衛景清と  
りもあへどもあへ丸を名のつもあへま  
あへ丸をきつと抜き持ちまを向ひ  
大勢よあつて入るやも困め  
葦園あつても田かへなつて痛げよ  
けの中よ若武者進みまをきつ懸  
つてあへまも切せむらつと飛んで

手もあつてもあつと息を勝負を見せよ  
けつ今も景清もあつとあつと  
祈念を致しつものあへ丸を  
あつとあつと霧もあつと隠れまや春日山花  
もよ飛びつとあつとあつとあつと時  
節を待つとあつとあつとあつとあつと  
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

大木

十

忠信

忠信

解題

別名を空腹はら吉野忠信、矢倉忠信ともいふ。義経吉野を頼みて身を寄せたりも、飛徒に追はれて再び此處を落ちたりし時、佐藤忠信を奉じて一人後に行き、格に上りて防矢を射、やがて座敷を新つて後の谷に落ちたりと見え、進手と戦ひつて主君の後を慕ひて都に上りし事を作れり。註本作者は文及の二百十番薩摩録に世阿弥作とあれども、右記録を見ず。

誰の方校覧

吉野時と似たれども、彼の昇殿に代ふるに、此は社士の武勇を以つて、しなるものなれば、健やかた雄々しからず、その外さして任心持といへば、御志をいかにして、先づワキの案内に依り、誰にやらわたり、しつと何事なく、確りと強みに應へし。

シテ

先づワキの案内に依り、誰にやらわたり、しつと何事なく、確りと強みに應へし。いかで、きしは確りと出で、管人々に御志を承り、しつと御志をいかにして、地に落ち、通じて、懸念なむる心ならず、しつと御志をいかにして、は氣をわけて、がしつと出で、此天一條受けて見よと、強々とわけて、地に落ち、其際、忠信は確りとあるべし。

ツレ

品位有りて、さりと、振ふ、これは眞は、これに、口惜し、や、し、は、氣、を、わ、け、て、が、し、つ、と、出、で、此、天、一、條、受、け、て、見、よ、と、強、と、わ、け、て、地、に、落、ち、其、際、に、忠、信、は、確、り、と、あ、る、べ、し。

ツレ(判官)

品位有りて、さりと、振ふ、これは眞は、これに、口惜し、や、し、は、氣、を、わ、け、て、が、し、つ、と、出、で、此、天、一、條、受、け、て、見、よ、と、強、と、わ、け、て、地、に、落、ち、其、際、に、忠、信、は、確、り、と、あ、る、べ、し。

ツレ(法師武者)

品位有りて、さりと、振ふ、これは眞は、これに、口惜し、や、し、は、氣、を、わ、け、て、が、し、つ、と、出、で、此、天、一、條、受、け、て、見、よ、と、強、と、わ、け、て、地、に、落、ち、其、際、に、忠、信、は、確、り、と、あ、る、べ、し。

ワキ

品位有りて、さりと、振ふ、これは眞は、これに、口惜し、や、し、は、氣、を、わ、け、て、が、し、つ、と、出、で、此、天、一、條、受、け、て、見、よ、と、強、と、わ、け、て、地、に、落、ち、其、際、に、忠、信、は、確、り、と、あ、る、べ、し。

忠信

一



大乗り調子に受へて死みなく扱ひ、其隙に忠信は下亦同じく、地に伏し隠れ、より気合を付けて

位を連の、今にかうよと連の谷を十歩にわたり、止りて其くは領のすして確りと大きく流し納む。

**辭解** 判官殿 源義隆を指す。判官は檢。伊勢の三郎義盛 義隆の功臣。伊勢國江

村の人にて、初江の三郎と云へり。義隆の西海へ逃れんとせし時、伊勢に歸りて守護首藤四郎(東鑑には山内胤三郎)と

と戦ひ自殺せらる事、源平或家記等に見えたるを、此曲には義隆に從ひて吉野に落ちし如く作ら

吉野を頼み云々 文治元年、義隆京都を去り吉野山にくだり、時、山内僧等頼朝を俾り、相謀り

頼朝の甲を着し俾りて判官と稱し、以て頼朝に義隆を逃れしめ、後にとりて頼朝に又自殺せし様を

引て、谷を越えて逃れたる事、平家物語、伊藤本八坂本等に記出たり。吉野山は大和國吉野郡

に在り。山中に山内守の神を祭れる金峰神社あり。神 衆徒 中古以降、清光寺院にありて、寺に

佛涅槃の時代、僧家之を兩部に祭り、藏王権現とせり。衆徒 技を講じ、熊果を運うせる僧徒。

詮議 評議して定。一定 唯 朝敵の虚名 頼朝、義隆の行動を疑ひ、終に 天の御加

護 衆徒が夜討をせんとする事の未發に知れたるは未だ運の 開く 其處より退轉するこ

も、善つとは詞不祥なれば忌 防矢 逆謀を免るゝ為、矢次ぎ早に 踏次 連 御説 せ。佐

藤忠信 陸奥信夫の佐藤、元治の子。見延信と共に義隆に從ひて武勲を抽でし勇者。此

兵に襲はれて、自刃せり。時に年二十。其末路は、今、 乃、具せられ 連れ從は 不覺の

涙 覺えず流 間道 ぬけ かまへて 便も涙 便りもなきの意 吉野川

云々 衆徒の押し寄せ来るを、氣に打ち寄りする波に勝たず、吉野川は大和大學を原山と高見山と

す。坊 衆徒者又は一部の僧徒の宿泊の便宜の爲に設けたる坊舎。坊中とは坊舎の中なり。わりなく

疾うく の音便。 はかばかしくや 殊勝らしやと 思ひかゝらんとや 寺柄に

我居を討ち取らんと思ひをかけ 高槽 城門の上の築きながら高き物見の建物。兼わて矢

てかゝらんとするかの意。 中差 旅に通常の矢を減りて持た、其中に指しそへたる別種の矢

を組みたるものと見ゆべし。 うちつがひ 矢を弓の強 よつびいて 十分に引きしほり

する矢一物、雁股とて特に鋭き 弓手 左の 空腹切つて 切腹したる様に見せかけて 上れや者ど

も 寄り進めはるの者共。 小太刀 帯き添への太刀。大 茨からたち ことにてはとげな

と下知なせらるなり。 慕ひ行く 義隆の後を 怪むる 逃ぐる姿を見とめて忠信な 拂ふと見えんが

切つておろるを忠信が 眞向 頼のま 大太刀かざり 大太刀を振りおさすこと。大を刀

拂ふと見えんが意。 諸膝おけて 一方の膝より一方 今はおくすの 蝶鳥 身軽に故

の膝おけて、 今はおくすの 蝶鳥 提がらる喻。

今はおくすの 蝶鳥 提がらる喻。

今はおくすの 蝶鳥 提がらる喻。

今はおくすの 蝶鳥 提がらる喻。

今はおくすの 蝶鳥 提がらる喻。

今はおくすの 蝶鳥 提がらる喻。

今はおくすの 蝶鳥 提がらる喻。

今はおくすの 蝶鳥 提がらる喻。

四番目

忠信

十一月

ツレ 法師武者  
源義經  
佐藤忠信  
ワシテ 伊勢三郎

ツレ 従者

<sup>早附</sup>  
 此の判官殿のち内よ。伊勢の三郎  
 義盛よ。いさても我が君判官殿ハ。此  
 吉野を頼み座の所よ。衆徒の詮議  
 變う。今夜夜討まじ。此の  
 由の向。此ま由一。此の存。  
 此の由一。此の義盛のま。

此が来るは早 田舎の 小 田 今何の為よ来るともいひ 此 唯今迄の事 露の儀もあつかひ 者どもと愛し。今夜夜討おくれ 土 人の物も自由の回。世世自由の心 為さばついで 此の道もあつかひ 早 口惜しやわらへんへの難

を道に。今も書へておくれ。 尊 徳の 虚名を晴へて其為あり。そして 露 比 の衆徒夜討おくれ。世世告げ 徳 條 として。此の道が道あり。まよ 者 今もわらへる。後よ。今 此處をゆく。 誰一人留まら。防矢を射。其後命を 奪へて。踏次も。世に。今 者や

おの。義盛様よりさし <sup>レ</sup> 書状最中にて  
承り申上り候。其の旨を御座り候。と  
申す。此の旨を申上り候。と。御座り候。と  
誰か申上り候。と。御座り候。と。御座り候。と  
思ふ所なき。か。り。佐藤の信を此方へ  
お申上り候。と。御座り候。と。御座り候。と

思ふ所なき

忠信のおたり候。 <sup>レ</sup> 誰か申上り候。と  
君より申上り候。と。御座り候。と。御座り候。と  
一。御座り候。と。御座り候。と。御座り候。と  
申す。此の旨を申上り候。と。御座り候。と  
申す。此の旨を申上り候。と。御座り候。と  
申す。此の旨を申上り候。と。御座り候。と  
申す。此の旨を申上り候。と。御座り候。と

思ふ所なき

中へ留まると隙を射其後命を全  
 うして路次をやどて宿しつゝお入  
 敷を畏つて承つらなつたら其の事ハ  
 ぞいへぬとも思ひ供におもへ思ひ  
 ぞつと餘へお祈りせむとてお入  
 敷申す者あり其時は意を替  
 れおはせしむとてお祈りせむとて。

お入への事ハお祈りせむとて  
 お祈りせむとてお祈りせむとて  
 申す事ハお祈りせむとて  
 面をお祈りせむとてお祈りせむとて  
 我が君を姑め奉り皆入とてお祈りせむとて  
 こそ惜しうとてお祈りせむとて  
 不覺の涙を拭  
 してお祈りせむとてお祈りせむとて

上  
かくては時刻後ハカひて。かくては時刻  
移りて我が君を姑め奉り門前を  
出て向道カミミチより密ヒソカにまのび出で給へざ  
忠信暫シブシハ馬供ウマツケハ地目暇メヒマ申し  
たまはせ。かまへて命イノチを全まもらして。馬  
供ウマツケよ素もとらむ。不忠フチュウあるべし心得ココロよと。  
涙ナミダを流ながさせ給へざ。かたけあしと忠

信ノブ唯一ヒト入イるレ便ツギも涙ナミダあるらん  
たよりも涙ナミダあるらん

又、物著  
中入

五衆ゴシュウ一ヒト上ノボり又マタツヨク  
吉野ヨシノ川カハ水ミヅのまよくハ駱ラク駘タイも来て。波なみ  
うち寄よりまゐる。風かぜあかハし。今いまも此こゝ坊ぼく

中ナカノ衆シュウ内ウチ申マシら。今いまハ夜ヨ更マシけ入イ静シズ

まゐる。衆シュウ内ウチ申マシら。今いまも此こゝ者ものぞ

五衆ゴシュウ  
あつそく頼朝ヨシトカようの侍サマは従したがひ。昔むかしは上の

忠言

上

かろこち

者ども判官殿の馬に乗りよき集りたり。  
 疾うくせめてを給りて—あらはが  
 ざも—や念くも我ら君よ思ひからん  
 と。よ。よ。ま。ら。軍の敵よ。此。一。條。受  
 けて見よ。高。檜。よ。ま。ら。あ。り。  
 高。檜。よ。ま。ら。あ。り。中。差。取。つ。て。う。ち  
 つ。か。び。よ。ら。い。と。交。つ。た。よ。真。先。か。け

小話

梅吟

たる武者あまた—まよらうと轉べば  
 目を驚か—肝をひ—度よとつ  
 とぞ襲めたりける。刀を抜き持して。  
 刀を抜き持して。う。手。の。脇。より。右。手  
 の。脇。へ。—。又。字。よ。ち。と。ぞ。見。え。—。が。虚  
 腹。切。つ。て。檜。より。後。の。谷。ま。ぞ。と。ら。び  
 落。つ。—。敵。の。兵。と。れ。を。見。て。よ。れ。や。者

かろこち

五

ども首を取れと。一度はつと奪り。  
打ち破りぬれぬ。喚き叫んで震動  
せしむ。其隙に忠信ハ其隙に  
忠信ハかねて用意のふた刀おつとり  
密よまのび出で。茨からたち分けら  
くつし暮りゆくを怪むる者ありて。  
あひこらむかひあひこらむかひは伏

一隠れ。闇をたぬるを思ひこもせむを。  
遁まもろくあつてあつて拂ふと見え  
一が真向あられてつらふあれば。續く  
兵士を力かぎ。打つた力を受け流  
諸膝かけて。切り放し通つて。今ハか  
よと崖の谷を蝶鳥の如くよ飛び翔り。  
蝶鳥の如くよ飛び翔つて。都をさ





誰か「駒も」といふと「さうさう」と運ぶ。二の地「出羽の國の守が」は更へて後やかた附け、代に出  
て餘はん時「よりさうさう」とかりて漸次に引き立て行き、「平家一統の」と確り、代とかりぬるを悲し  
と内へ取り、其後を又さうさうと、「程なく」以下は晴れやかなる語、「これぞ」矢のより確りと鎮めて止  
むは「身の」もはるはての「さうさう」と取つて、語は「主權」とより確むべく、「口」半は氣を更へ  
て精いつつと「し」たるは「は」に語を出す。此御座の物を「さ」はわつてさうさうと附け、「あれも」も  
せに「出づ」さうは「と」確り、其後を更へて語の納む。襖の「開」を作つて「さ」はさうさうと附け、「あれも」も  
「さ」は「さ」は寛りと大きく出で返りより氣合好く火「い」来り調子に語ふ。「熊坂の長靴」は「三」は  
折かゆるやかに確りと起して通りより鷹揚に語の行き、「いか」なる天鹿より確りとわかる。「あら」は不  
く「い」や「さ」は心持を更へて少く語に出で、返りより氣勢鋭く語のつけ、「八方」拂は以下位を運  
めて烈しきやうにあるべく、「打物業」にて「さうさう」は東つて勇壯に語の納むべし。

注意すべき語の方

子方の語の中、三枚表の「さうさう」を始めて「オ」の入は元來サシの調子か  
は單に字に語ふべきを、入の音形に扱ふものなり。されば入とは  
あれと上の入の音位まで落し上げず中音の入の高さ即ち上の音の音高さに止めて次の「さ」を  
中音に落す。

辭解

木も東の云、角田川の次第「木も東の旅衣日も遠々の心か」を火「更へて」速速  
行く衣、日も(包)遠々(張)ら(は)共に衣の縁様なり。三條の吉次信高、平治物語に「奥州の全商人吉次」。義経記に「三條  
毎年奥州に下る全商人かりける」。高荷、鞍馬に高々と後みたる荷物。粟田口、愛き旅に逢ふを粟田口にかく。粟田口は京  
東國街道の松坂、栗田口より山科へ通す。四の宮河原、四の宮は宇治郡山科村の大字。右に明  
よりいふ、浪水北方より来りて此村逢坂云、近江國大津市の南なる坂路をいふ。此山も山城近  
を過ぐる邊を四の宮河原といふ。逢坂の國の清水に影見えて今、日本最古の關所なる逢坂  
の關あり。關路の駒とは貫之の故。逢坂の國の清水に影見えて今、日本最古の關所なる逢坂  
や引くらん望月の駒に「より」て云い慣れたる詞なり。關路を行く馬の指。粟屋の床、逢坂  
を過ぎてこゝに説ひ住まひせ。粟津の原、思ひ合はするを粟津にむく。粟津、駒もといふ  
し、輝丸の古を連想せらるるなり。

云、風雅集に「賣物抱えず供ふる東路の頼田の長指音も」といふ。野路、勢田の東北一里、今粟田郡老上村  
らに。勢田の長指は勢田川に過りて東海道に過る長指なり。

守山

古今集の歌「白露も時雨もいたくも山は下葉残らす色づきにけり」を引きて夕露の  
漏ちを守山にむかひ、更に下葉色照ると轉す。守山は近江野州郡の一驛なり。一に森山  
夕月夜、月のほのめく夕方。その月影、鏡の宿、今、南を即ち鏡山村といふ。半若此宿にて手づか  
出づ。平治物語に「五年十月と申す、兼安四年三月三日の晚鞍馬を出で(中略)其夜鏡の宿に着き夜更  
けて後、手づかり髪取り上げて懐より烏帽子取り出し、ひたと着けて打出し、給へば(中略)烏帽子  
親もかければ手づかり源九郎。早打、馬を馳せて急郵する使者。又は事柄、こゝには、  
義経とこそ名乗り侍れしと云く。東男、副のたる。三番の左打、三番は烏帽  
武士の被る打烏帽子。又侍烏帽子ともいふ。烏、東國入。三番の左打、子の大小の  
帽子を着しとは童形を男姿に更ふる烏なり。

三條烏丸

丸通との交又する附近。八幡太郎義家、源頼義の長子。八  
て八幡太郎といひ、康平五年父に隨ひ安部貞任を討ちて之を亡し、六年功を以て出羽守に任  
せられ、永保三年陸奥守となり、鎮守府將軍を兼ね、天仁元年六十八歳に於て卒せり。

倭貞任

陸奥國の酋長頼時の子。父と共に陸奥を押領して朝  
命に禮はさり、水原頼義の東攻に會ひて戦死せり。宗任、貞任の弟。頼義と戦ひ軍  
られしが、康平七年伊豫に被たれ、後信とかりて筑紫に移れり。

上洛

都に上ること。たのめに思召され、大いに喜び給ひ、  
後信とかりて筑紫に移れり。

御世に出羽

御世に出る出羽に、かく、こゝに出羽守陸奥守  
と、いへば義家の任官なるに、よりなるべし。

御果

任合せよ。祝言、祝賀の言。引出物、賜物。上右祝宴を、に宴客に馬、保元の云、宗徳上皇  
報、きむくい。祝言、の言。引出物、を引き出して贈りし、よりいふ。保元の云、宗徳上皇

報、きむくい。祝言、の言。引出物、を引き出して贈りし、よりいふ。保元の云、宗徳上皇

長と謀り源為義等を召して鳥羽法皇の崩御に乘じ兵を起したまひしを保元の亂といふ。平清盛此亂に功あり之より次第に頭領の地にす。平治の亂を経て平氏愈々繁栄源氏全く衰へしかば保元の其以後平家一洗と云ふと作る。よゝゝそれとても云。假令源氏衰へたりとも前代に忠勤を盡し、後果の現れ時機もあら。折知る 時節の意をあらわしと云。鳥帽子櫻 廢曲元那當我にさらば元んかとなり。子折ると云ひ兼ぬ。烏帽子櫻 廢曲元那當我にさらば元の摘時のくをりた来て、烏帽子櫻の花を見んしをとりたりとあり。松屋筆記に「今常陸國の保元非ずらる烏帽子櫻といへり。是も元服して烏帽子を着初むるや木の若に寄せを風流にいへり」と見ゆあり。かくる名の櫻ありきとも思はざ。三色組 白赤青の三色を交へ組みたる烏帽子の組。氣れば或は松屋筆記の説をとるべきか。

**高く** 品好 御ぐし 髮の 日本一 此類無きもの意。代り 鉞 野間の内海 今張國知多郡に野間村と内海町とあり。舊庄名の 鎌田兵衛 義朝腹脹の家臣。保元物語等には野間は廣くして今の内海町をも包有せしなり。常服若腹には 三男 常服は欠條院の雜仕なり。政家とあり。其妹を烏帽子子屋の女房に作。うかつたるは註曲作者の技巧なり。腰の物 腰に佩く。鞍馬の寺 京都の北三里はかりなる鞍馬山。義朝は眞三男なり。源平盛衰記に義朝の妹めて頼朝を訪ひて名のりし言に「是 頭の殿 左馬頭殿は故左馬頭殿の子息九條當子(平治物語に雜仕)常服が腹に半若と申侍りしが云。 頭の殿 義朝を指す。言語道断 言語にていひ現し得ざる。こんねんどう 刀の若の如く作られたれと。夏文の洗に古年刀にて古刀といふ。腰の物 腰に佩く。鞍馬の寺 京都の北三里はかりなる鞍馬山。意なるべしとある由なれど如何。鞍馬の寺 東光坊阿闍梨蓮恩弟子釋林齋阿闍梨。行方も知らぬ 月影のうつらひて薄れゆくや。覺田が弟子となりて遮那王と申しけり。影うつる 月影のうつらひて薄れゆくや。同じ。ゆかり 故。あこやの前 作者の假。影うつる 月影のうつらひて薄れゆくや。宿を 旅を飾磨は 旅を飾磨は(の濃きもの)に染めたる布を産出せしより飾磨のちちといひかちを

徒歩はだしに掛く。熊野の道にも。世の爲身を捨衣云 源氏衰微の世の爲に身を捨つる。身を付けて振。力なき。止むを得ず。美濃の國 美濃の國に掛く。赤坂 美濃國不破郡。談合 相。やはかいか 面々 人々。物に掛く。物の具して 甲冑を。表 夕も過ぎて 向ふべしといふを夕べに掛く。現し衣云 兵法の秘術を現すや。接接を妻戸に掛く。妻戸は入の戸。現し衣は源氏物語藤原の巻に事の由の。耶装の上に現るをいへる詞なれど此には辭の連綴に用いたるまでにて意なき。沖つ白波 沖つ白波の序。白波は盜賊の異稱。後漢の昔市の賊。西河の白波谷より起りしに。寄せかけて云。より時人白波賊と稱せしに基く。打入りは波と盜賊とに云ひわけたり。寄せかけて云。白波の寄せ打つ者の高きと。盜賊の勢の寄せ。内の風はし速い 盜賊仲間の隠接の終に作。来りて夜討をする聲の高きと。兼わていふ。火振の親方 火振を振り廻す。松明のよ手 松明を投げ込みて其燃ゆるを。意。投松明 内の様子を見つる。蝶鳥 身軽に敏捷な。御知見 照。熊坂の魁。えい 登り。曲者 曲には怪物。松明のよ手 松明を投げ込みて其燃ゆるを。の。さてよな かねては負けにてある。物々 仰山なり。御知見 照。熊坂の長靴 異本義經記。雜々拾遺などに出づ。たほどり 歩み 履り歩みの延音。調。は。かぐしや 殊勝らやと。めだれ顔 他を軽んじ。さそく 早速の字にて。腰車 腰斬り。十方切 以下何れ斬り候ふ様をいひたる古き俗語を引き列ねた。腰車 腰斬り。獅子の齒がみ 恐しく怒り狂る形容に用いたるは太平記未坂。まのぎを削つてに。合戦の陣に、殊獅子の歯齧みせしとあり。

て思しく斬り合ふさま。吾我物懐に「い」のきかけつり合  
ひて「い」のきは刀の刃と背との向にあり一條の高き筋。  
月物にての  
の斬合也。  
御曹司 牛若を  
指す。打物業

五番目  
畧二一  
四番目ニモ

鳥帽子折

九月  
子方 牛若丸  
ツレ 鳥帽子屋ノ妻 後シ 手共天鼓  
ワキ 鳥帽子屋亭主 後シ 熊坂長靴  
ワキ 三條ノ吉次  
尾 第 吉 六

即録案上  
ツヨク  
末も東の旅衣。末も東の旅衣日も  
途こと急べらん  
信高まとい。われ此程數の財を集め。  
弟まゝの吉六を伴ひ。唯今東へ下りい。  
いよの十太六。高同蒼いものを集め東へ下  
いよの十太六。高同蒼いものを集め東へ下  
いよの十太六。高同蒼いものを集め東へ下

Omni. 1. 1

まはりの山を渡りて、呼掛<sup>子方</sup>の山へ

あつきの旅人、舟に乗りて、舟に乗りて

申すは、舟に乗りて、舟に乗りて

とも、舟に乗りて、舟に乗りて

給ひたる、舟に乗りて、舟に乗りて

め、舟に乗りて、舟に乗りて

ふも、舟に乗りて、舟に乗りて

舟に乗りて

●小 説

たれ、唯<sup>かん上</sup>伴<sup>ヨフク</sup>ひて行<sup>トモナ</sup>き給<sup>ナ</sup>へ

辭<sup>ツク</sup>由<sup>ナ</sup>りて、舟に乗りて、舟に乗りて

らま、舟に乗りて、舟に乗りて

今日<sup>キウ</sup>ぞ、舟に乗りて、舟に乗りて

松<sup>マツ</sup>坂<sup>ザカ</sup>や、舟に乗りて、舟に乗りて

の後<sup>ノチ</sup>は、舟に乗りて、舟に乗りて

あつきの旅人、舟に乗りて、舟に乗りて

上乗<sup>ウラノリ</sup>の、舟に乗りて、舟に乗りて

葛葉屋の床のまゝ。都の外の夏夜を  
まじ。かゝるこゝろ。今。思ひ粟津の原を  
うらら。留。ほ。して。駒。も。も。い。ち。ち。と。踏。み。あ。ら。し。  
勢田の長橋。うら。渡。り。野。路。の。夕。露。  
守。出。の。下。葉。も。し。照。の。日。の。影。も。た。た。む。  
く。よ。向。よ。み。月。夜。鏡。の。宿。よ。暮。る。か。よ。  
け。鏡。の。宿。よ。し。あ。ら。わ。ら。し。 物。か。ら。さ

程。よ。鏡。の。宿。よ。暮。ま。て。い。此。處。よ。身。体  
な。あ。い。さ。し。あ。い。さ。し。 子。か。シ。カ。シ 唯。今。の。早  
お。お。お。お。へ。く。一。箇。か。ら。さ。く。も。あ。ら。ら。身。の  
よ。お。し。さ。あ。い。さ。し。こ。い。し。 中。心。に。あ。い。さ。し。こ。い。し。  
髪。を。あ。ら。し。馬。唱。子。を。著。 中。心。に。あ。い。さ。し。こ。い。し。 東。男。よ。身。を  
や。つ。し。て。下。ら。な。あ。い。さ。し。 中。心。に。あ。い。さ。し。こ。い。し。 思。ひ。さ。し。こ。い。し。 中。心。に。あ。い。さ。し。こ。い。し。 此。内  
入。葉。内。申。る 中。心。に。あ。い。さ。し。こ。い。し。 誰。を。あ。た。ら。し。 中。心。に。あ。い。さ。し。こ。い。し。

馬留子の折に寄るはる 例  
 馬留子の折に寄るはる。夜半の事  
 して程よ。明日折して葉を寄るはるよ  
 して 折からの旅よ。今宵  
 折して寄るはる 折して葉  
 して寄るはるはる。折に寄るはる。  
 折して寄るはる。折に寄るはる。

左折の馬留子  
 ついで

三番の左折よ折して賜はるはる  
 して折に寄るはる。折に寄るはるの時  
 して折に寄るはる。折に寄るはる。  
 左折に思ひよ。折に寄るはる。折に  
 尤よ。折に寄るはる。折に寄るはる。  
 して賜はるはる。折に寄るはる。  
 程よ。折して葉を寄るはる。折に左

折の烏帽子よりして。嘉加例めでたま  
物語の語つて聞かせ申さうせむいよ  
る子カからば物語りの入ミテても  
某が先祖よとい者ハ。元ハ三條烏丸よ  
いひよあ。とて其頃ハ八幡太郎義家。  
安徳の貞任宗任を遣信田到あつて。程  
なく都よ遣上洛あり。某が先祖よて

い者よ。此左折の烏帽子を折らせられ。  
君よ遣出仕あり。一時。帝あのみよ思

め。其時の遣恩賞よ。奥陸奥の國  
を賜まつてい。あつらも又其如く嘉加例  
めでたまい烏帽子折せられ。此烏帽  
子カをいひたれて程なく遣せよ。出羽の  
國の守り。陸奥の國の守り。あらせ給

● 蜀吟

蜀吟

五



ちん果報あつて世よ出で給らん時。  
祝言申し、烏帽子折と名をたてて  
たより出物賜をせ給へや。あまれ何  
事も昔ありけり。烏帽子の左折の  
その盛源平兩家の繁昌花あらざ  
梅と櫻木四季ならん。春秋月雪の  
眺られぞと幸ひひりやらのまよ。

小話

保元の其以後の平家一統の世あり  
ぬるぞ悲しむ。あまも報あ  
らざ。世愛り時来り。あま知る烏帽子  
櫻の花候か。ん頃を待ち給へ。  
祝ひつ。程なく烏帽子折りたてら。  
花やうよ三色組の烏帽子懸緒取り  
出。氣高く結びまま。只たれて

一 賢人ノカクハ。家ノユキニシテ。子ノ嗣カレシキ  
 一 長カシ目ビ。天晴。夜。暑。量。ヤ。ニ。シ。ゾ。ラ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ  
 一 子カ  
 一 日。夜。一。馬。留。ヲ。シ。テ。念。ウ。申。一。ト。シ。テ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ

一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ

一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ  
 一 夫ノ大。樽。ヲ。申。モ。マ。モ。不。足。ハ。ヨ。モ。ウ。ラ

事<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>田<sup>ノ</sup>畝<sup>ニ</sup>り<sup>テ</sup>金<sup>ノ</sup>貨<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>落<sup>ル</sup>流<sup>ル</sup>  
何<sup>レ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>の<sup>レ</sup>葉<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>今<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
野<sup>ノ</sup>回<sup>ノ</sup>の内<sup>ノ</sup>海<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
鎌<sup>田</sup>兵<sup>衛</sup>正<sup>清</sup>の<sup>レ</sup>妹<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>常<sup>ノ</sup>般<sup>ノ</sup>腹<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
半<sup>若</sup>子<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>時<sup>ノ</sup>頭<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>腹<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>

此<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>腹<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>常<sup>ノ</sup>般<sup>ノ</sup>腹<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
給<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>其<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>腹<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
ら<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>常<sup>ノ</sup>般<sup>ノ</sup>腹<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>の<sup>レ</sup>葉<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>今<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
野<sup>ノ</sup>回<sup>ノ</sup>の内<sup>ノ</sup>海<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
鎌<sup>田</sup>兵<sup>衛</sup>正<sup>清</sup>の<sup>レ</sup>妹<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>常<sup>ノ</sup>般<sup>ノ</sup>腹<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
半<sup>若</sup>子<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>時<sup>ノ</sup>頭<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>腹<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>

承り候と申す。此等腰のおもむかひの思  
知し申す。此の御座り候。なごたごた  
申す。腰の御座り候。なごたごた承り  
及び此の腰の御座り候。なごたごた鞍馬の  
昔も御座り候。牛若殿もて御座り候。お  
れも此の腰の御座り候。なごたごた  
いふ。なごたごた。なごたごた。なごたごた。

此の御座り候。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
の御座り候。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
なごたごた。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
行くも若らぬ。田舎人の。あれよ。情の  
御座り候。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
鞍馬の。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
なごたごた。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
なごたごた。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
なごたごた。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
なごたごた。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
なごたごた。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
なごたごた。なごたごた。なごたごた。なごたごた。  
なごたごた。なごたごた。なごたごた。なごたごた。

●小議

かりの者が、馬目の程のがーんかよ。  
 あらまゝ鎌田が妹よ、あーやの前が。  
 かしら、子方が、げよ知るん理われとそり。  
 身のあるはての半若丸。おびりもあか。  
 今の身を、語れんま後と。知らん事ぞ。  
 不思議ある。はや志のめも明け。  
 行けバ、はや志のめも明け行けバ。目。

も名残の影らつる鏡の宿を立ち出。  
 づる、痛ぢの馬事や。さしも名高。  
 き馬身の商人と、併ひて。旅を飾磨の。  
 徒歩、蹠足目もあてられぬ馬風情。  
 時代、愛の習まで。せのため身を。  
 捨衣、怨もあや思が。東路のお。  
 はなつて、わの思。あなで、あくまで。

●小議

●

腰の物を強ひて、素らせむげに、  
あゝとて、請けまつ、あれ若しも、  
つゝとて、思ひ知るべし、  
人と伴ひ、真夜を旅よ、  
美濃の國、赤坂の宿、  
坂の宿よ、著者さまよ、  
程よ、赤坂の宿よ、  
中入

また、此處の宿を取つて、  
いかに思ひはせしか、  
辨へ、  
たゞとて、  
の悪言、  
討た、  
は、  
狂言

四下

十一

たゞく兵を。五十騎を。斬り伏せ  
あふ。や。は。あ。事。の。ま。う。て。こ。ら。ん

頼も。あ。ま。あ。行。ち。の。か。あ。業。皆

たのみ。面。武具。て。待ち。給。入。

あ。ん。大。手。の。向。い。と。あ。も。過

あ。て。鞍。馬。上。の。あ。も。過。て。鞍。馬。上。年

月。習。ひ。兵。法。の。術。を。今。こ。そ。の。現。に

衣。の。妻。戸。を。開。き。て。沖。つ。白。波。の。打。ち。入

る。や。聲。と。待。ち。居。たり。打。ち。の。つ。を。聲

し。と。待。ち。居。たり。早。鼓。寄。せ。あ。け。て。あ。つ

白。浪。の。音。高。く。関。を。作。り。て。馳。ま。け。り

あ。の。若。者。も。あ。前。の。大。手。が

く。あ。つ。と。開。け。た。あ。の。内。の。風。が。早。い。が

あ。こ。の。由。の。風。早。く。て。或。は。討。た。れ。

後シテ初

後ツレ

打上

カレ上

子カ

地上

打切

後ツレ  
天勢

早鼓

又ハ重手を買ひたのち申ら 不思議な事  
内ハ其言は兄弟をいふにのみかきか  
き何者らある 投松明の影より見  
入る。年の程十二三だありある幼き者。  
小た方こそ斬つて廻りふらなみから楪  
鳥の如くあるより申ら 針で摺針を郎  
兄弟ハとていふ振の親方よりて。一番

よ斬つてのりてを例の小男あたり金ひ。  
兄弟の者の細首を唯一討よ打ち落  
たより申ら せんく何と何とがの  
者兄弟ハ餘の者五十騎百騎よら  
りきものちあり斬つたり斬つたり  
彼奴ハ曲者よ 高瀬の四郎といひを  
見て。今夜の夜討果一ありあること





して。どろいよ。面を向へ。なぞ。唯。攻め入  
 れ。や。若者。ら。も。と。大。音。上げ。て。呼。び。あ。り  
 けり。關。を。作。り。て。斬。つ。て。の。り。けり。  
 あ。ら。物。こ。ー。や。こ。ら。よ。あ。ら。物。こ。ー。や。こ  
 ら。よ。あ。ら。物。こ。ら。よ。あ。ら。物。こ。ら。よ。  
 も。懲。り。も。打。ち。の。り。も。ハ。藩。も。知。見  
 む。し。人。も。助。け。て。や。ら。も。の。を。と。小。口

ハ幡も

打上頭斬切

● 獨吟

して。どろいよ。面を向へ。なぞ。唯。攻め入  
 れ。や。若者。ら。も。と。大。音。上げ。て。呼。び。あ。り  
 けり。關。を。作。り。て。斬。つ。て。の。り。けり。  
 あ。ら。物。こ。ー。や。こ。ら。よ。あ。ら。物。こ。ー。や。こ  
 ら。よ。あ。ら。物。こ。ら。よ。あ。ら。物。こ。ら。よ。  
 も。懲。り。も。打。ち。の。り。も。ハ。藩。も。知。見  
 む。し。人。も。助。け。て。や。ら。も。の。を。と。小。口

地拍子  
又 熊坂も  
千熊坂も

あらははるぐーや盗人よあらははるぐー  
や盗人よめだれ顔ある夜討りさる  
もあられも<sup>ノ</sup>盗人ものさるてさる間  
あらせむ斬つて懸る熊坂も大をカ  
きひの曲者あはれさるてさるて  
十方切ハ方拂や腰車破城の返一  
風まくり<sup>ヤ</sup>剣降ら<sup>ヤ</sup>獅子の齒がみ

大ニ  
大ニ  
大ニ

紅葉重花がさね三つ頭より火を出  
して志のきを削つて戦ひ一が秘術  
を盡ま<sup>ヤ</sup>大なる方も<sup>ヤ</sup>曹司の小たかよ  
斬り立てられ受けたるかよあつてぞ見  
えたりける<sup>上</sup>打物業まで<sup>大鼓頭</sup>通よま<sup>打込</sup>  
打物業まで<sup>大鼓頭</sup>通よま<sup>打込</sup>担いで力の勝  
負せんとして<sup>大</sup>力投げき<sup>大</sup>て<sup>大</sup>大手を廣

大鼓頭

打込

げて飛んでからを背けて諸膝薙ぎ  
 給へど斬られてかつとと轉びけるぞ  
 起きよらこさてつらつ所を真向  
 よりも割つひらけて人と見えさつる  
 熊坂の長靴もつらよあつてぞせ  
 よける。

大瓶程程

解題

一に泰平程程、泰坪程程、太平程程等の字を充つ。湯陽江に抽める程程、酒賣る  
 孝子に盡盡蔵の酒壺を興へ、又餅ひて舞ひたることを作り、構想は帝の程程と同トけ  
 れども、これは今は廢曲となり。七人程程(別名寄合程程)の折シテの段を著しく有異したるもの  
 て現今の程程より直接別れたるものに非ず。七人程程は折段二人後段七人の程程出づるものにて、現  
 今の如く程程が未だ半終の式とならざりし當時、觀衆に喜ばれたる曲の持歌を極端まで擴大したる一  
 種の習態たりたりなり。觀世流貞享版二兩番之外百番の流本卷二に觀形程程として但み入れたるは、  
 此曲の本文に流りて地曲本を附したるものにて、奥の觀形程程(別名嚴程程、備時程程)とは全く別  
 なり。又名寄に大原程程とあるは太平程程の「まき」を「まき」に傳へ流りたるもの、同トく太平程程と  
 あるは、太平を「九平」に傳へ流りたるものなり。まきもと程程、九本程程、九本程程等の字を傳へた  
 るは皆同系統の流説なり。

語の方便概

一 聲を前に流ひ起し、調をさりと、つもの酒を垂りけりを後ゆかにかいつて地に流す。次の詞答  
 はすらりと取つて、以下を確りと云ひ、疑ひなき高風と、と氣を籠めて破くならぬやうに地に流す。  
 地曲一節の一字は常より低めに抑ふ。後折は前よりも精れやかに響りとある。ツレ、不思議や此友  
 べー、舞臺の節の響きは響びくときあさく、返り掛け響きは確りと流す。ツレ、不思議や此友  
 出づワキ、折時りと響き以下の詞を言ひ、シテ出でてよりは徳トマセたりと。地、初の上段はさりと  
 ズロキ、扱へども、此程はいつくの人ともさうは少く確りとあるが好し。地、出で、取かやここ  
 をげににて折續め、市人のわれを笑ふらん、と確り流ひ止む。次の夕の空は確りと取つて通しを  
 さらりと取り、酒も赤くさき愛りてと確り、以下運ひ好く、止りの返りにて流む。後の山酒と聞くと  
 は流り拍子に流りて、折調重かに調かに流ひ、不思議や此友の以下は折さたりと後折、又確りは現れ出で  
 てより更に流りて流ひ、後の「現れたり」を少く文きく返す。頭は段の夜、そは流りて出、飯々に  
 運びまつて興する体にもてなすべし。シテとの折合、盡くせぬ宿には確りと、これまでなりや  
 以下はゆらりと長閑に、あやたく流ひ納む。

解題

唐土

唐土、昔、支那を  
 呼ぶ。金山、平家物語に、揚州の金山、前州の陸、吳郡の陸、蜀江の錦などあり。  
 又、江蘇省揚州の揚子は對岸に金山と稱する山あり、此附近古く

大瓶程程

黄金を産したりと見ゆ。後に富貴となる事を作る因にて其地を掘びたるなり。これをカ子キンガ  
ンと落ふは、發音同トキと判字多きと區別せん島金字を後にカ子キンと判トたるを其極用たるなり。  
高風 取作の入札。取 取作の文字を當つ。わたづみの 海上の。いづこも知り難き波向より日の昇るといふを。  
みは海の古語。正しくつ字を清みて判むべきなり。琴詩酒 和歌朝歌集に出でたる白樂天の寄越協律の句  
酒功賛 白樂天が酒功を稱賛せる詩の意。和歌朝歌集に出でたる白樂天の寄越協律の句  
まかへて 白居易の琴詩酒を愛せしに引きかへての意。海陽の江 今の江西南九江府の北方。揚子  
江の尋水を合する附近の古稱。  
初は必ず馬りてまらぬ。やがて再び来りて酒を呑み。亦履をばき。醉へば履足に腫。天の憐みのいつ  
りてまらぬはす。無考之を捨ふとなり。海に狂むと作れどもは淫曲作者の創意なり。天の憐みのいつ  
み。泉の壺 涌くには酒の自ら。夕べの空 暮ふの空。せにぬりの にぬり(丹塗)の如くの色。さは桂  
御酒と聞く 鹿々に御酒と聞くぬれこはりや秋風のとあらしを踏 菊月 陰曆九月の雅名。開  
一重山 信濃地科野にある山の名を以てし。菊の盃 九月九日菊の宴などには菊の盃を踏りて飲  
な 物足ら千思 妙なる泉 不思議なる泉にて。前ト 泉の口 泉の壺即ち瓶。菊の露 秋露集  
右の前の白雲亦日々に舞 盡させぬ宿 泉の盡させぬと泉の味。長柄の柄杓 命長きこといひか  
せつもりて開とならぬ。盡させぬ宿 泉の盡させぬと泉の味。長柄の柄杓 命長きこといひか  
道俗 佛道に入りたる者。もとの泉に収まり 酒をのふはて柄杓を。縁り言度く 縁ひ  
秋意或ち々の祝言を何處となく傳り通しむるの意。

切能

大瓶狸

九月 後ツレ 狂々 (前、童子)

早稲  
とれん唐土金山の林鹿よ。高風と申ま  
民まてら。われ親よ孝あるよ。よう。次第  
次第よ富貴のさかたはあつてある。  
又此間らつてくも知らず音子数多  
ある。某酒を買ひつら。むなむある  
てある。ある者あるもや尋ねや

大瓶狸





ツヨク上  
下リ端(二段)  
(後シテ出)  
打上打返(サ)

おぼつあき。中よ。向ひて我が友の。あど  
遅あやう。給よ。ぞや。なき。給入。友人  
又。狸ご。の。現れ。出。又。狸ご。の。現れ。出  
て。の。高。風。は。妙。ある。泉。を。興。入。ん  
と。は。向。を。分。けて。清。陽。の。江。の。行。も  
近。く。現。れ。たり。頃。の。夜。月。面。白。く。  
頃。の。夜。月。面。白。く。頃。の。夜。月。面。白。く。

●仕舞

静。ま。り。て。あ。ま。た。の。狸。ご。大。瓶。よ。あ。が。り。  
泉。の。口。を。さ。ら。ん。と。ぞ。見。え。ら。う。道。も。あ。が。  
り。あ。ま。さ。る。は。な。め。も。は。め。も。は。ま。さ。る。を。  
ぬ。泉。も。い。づ。れ。も。戯。れ。舞。ふ。と。あ。や  
菊。の。露。積。り。て。盡。ま。ぬ。此。泉。盡。ま。  
せ。ぬ。宿。よ。返。し。授。け。置。ま。い。て。  
ま。で。あ。り。や。酔。ひ。伏。も。夢。の。響。え。む。こ。

中ノ舞

地上

地中

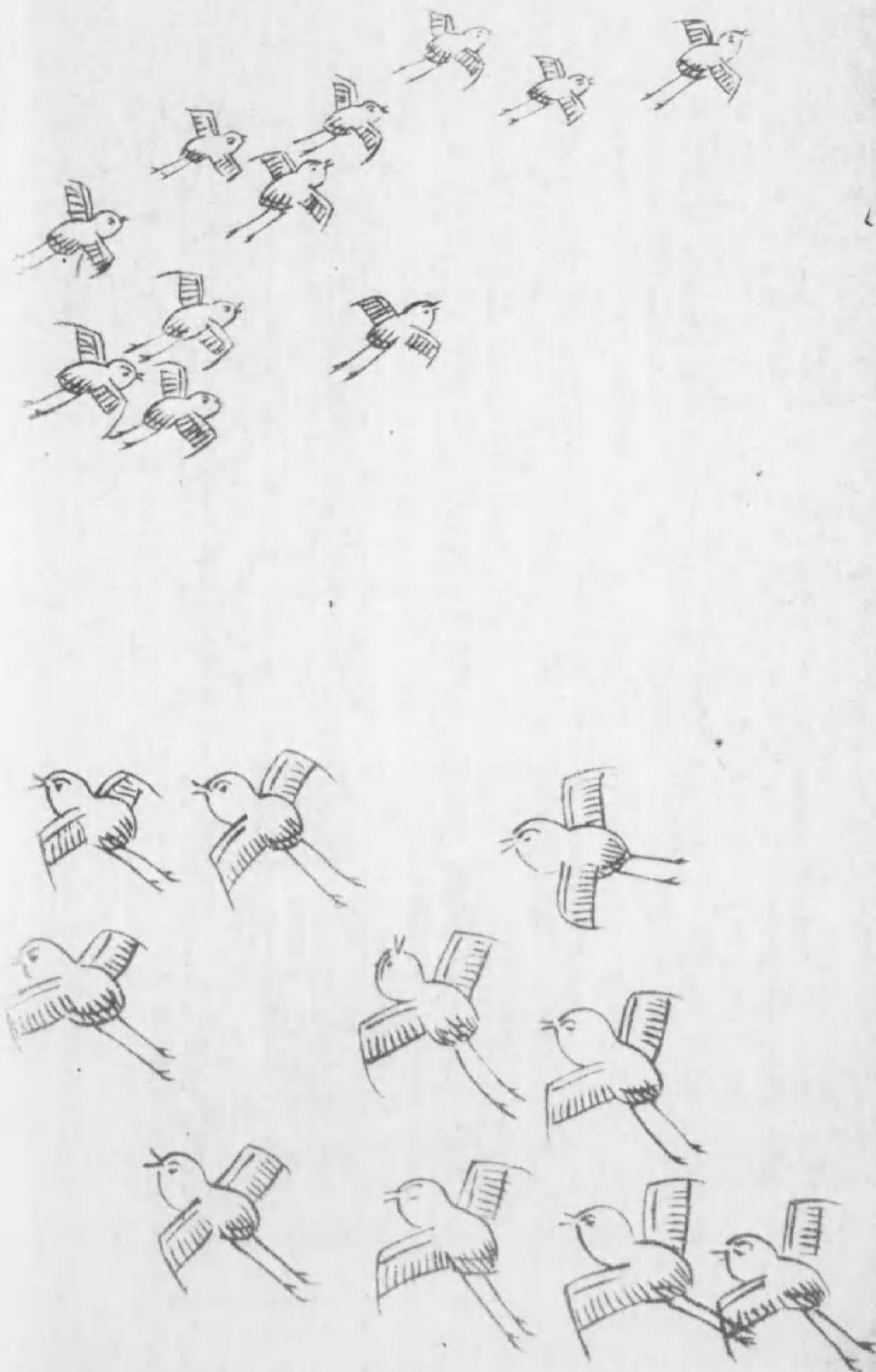
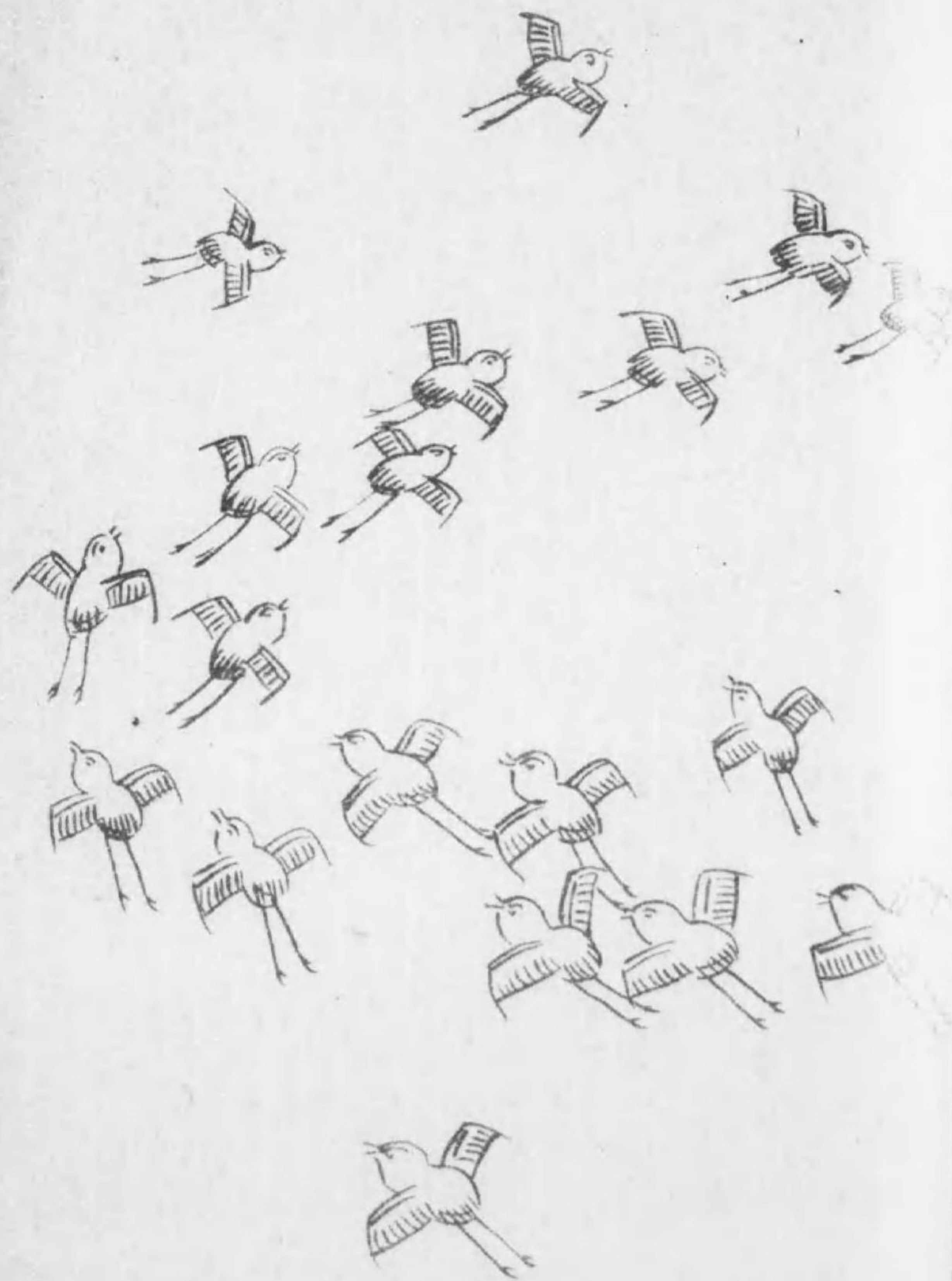


170  
171  
50

地指子  
思ふ又起きあがり

思ふ又起きあがり。命長柄の柄杓の  
 酒道俗男女。残さぎ勧めもとの  
 泉子細まうりけい。いれもくはも  
 とらよろしく。よろしく。と。縁の言茂く。  
 千秋萬歳君千代まで。と。千秋萬歳  
 君千代まで。と。禁ぶらうは代こそめで  
 たけれ。

大正十年十月十四日印刷  
 大正十年十月十五日發行  
 訂正者 丸岡 明桂  
 相債者 丸岡 明桂  
 發行所 土居源太郎  
 東京市神田区今川小路三丁目九番地  
 印刷所 鈴木彌作  
 東京市神田区東松下町十二番地  
 印刷所 信英堂印刷所  
 東京市神田区今川小路三丁目九番地  
 發行所 親世流改訂本刊行會  
 電話九段 二三〇五番  
 櫻橋東京 一三四七五番



終

